

# あいち国際女性映画祭2009

# ディリー ニュース

## 観客賞『とらわれの水』、愛知県興行協会賞『あした天気になる?』に決定!!

昨日、午後6時30分からの交流パーティーの席上、あいち国際女性映画祭2009の「観客賞」と「愛知県興行協会賞」が発表されました。

ノミネート16作品のうち、みごと観客賞を獲得したのは、ディーパー・メータ監督の「とらわれの水」、興行協会賞には、宮崎信恵監督の「あした天気になる?～発達障がいのある人たちの生活記録～」が選ばれました。

観客賞のメータ監督は、映画祭に会場していないため、映画祭事務局スタッフが代理

で受け取り、後日、監督のメッセージがホームページで披露されるとのこと。

興行協会賞を受賞した宮崎監督は、「皆さん、本当にありがとうございました。最初から映画祭に呼んでもらえただけでラッキーと思っていました。この賞は、年の功でもらえたのかな、一番年上になるので、これまでのご褒美ということかも。今、若い人たちが頑張っており、応援してもらいたい。」とお礼とメッセージを述べました。



左から愛知県興行協会森田理事、宮崎監督、映画祭事務局スタッフ、あいち男女共同参画財団栗本理事長

## 本日午後1時半からワークショップ「世界の“フィルム・アーカイブ”を展望する」を開催!!



今年、70以上の国・地域から148団体が加盟する国際フィルム・アーカイブ連盟\*(FIAF)のアジア初の会長として選出された岡島尚志を迎え、「世界の“フィルム・アーカイブ”を展望する」をテーマにワークショップを本日、午後1時30分から開催します。

岡島氏は、東京国立近代美術館フィルムセンター主幹という立場から、これまで映像文化を次世代へ継承するため、重要な役割を担ってこられました。

また、本日のワークショップのために、貴重な資料を多数ご用意いただいています。たっぷり2時

間、専門家ならではの充実した論議をお楽しみください。

入場無料

日時 9月6日(土)13:30~15:30  
場所 ワイルドあいち 3F 会議室5  
定員 40名 ※定員になり次第締め切り

## 映画祭4日目 ドキュメンタリー監督のトークサロンとゲストトークで盛り上がる

今回初の試みとなったトークサロンでは、5名のドキュメンタリー監督を迎え、各監督と参加したドキュメンタリーファンによる突っ込んだ議論が進み、会場は熱気を帯びていました。

また、メインプログラムの「赤い点」始め3作品のほか、日本映画名作の「ぐるりのこと。」の橋口亮輔監督が来場し、会場が沸きました。

### ▼トークサロン

「女性ドキュメンタリー監督と語る」をテーマに参加したのは、鯨工マ監督(「つぶより花舞台」)、宮崎信恵監督(「あした天気になる?～発達障がいのある人たちの生活記録～」)、三浦淳子監督(「空とコンローイ〜タイ、コンテップ村の子どもたち〜」)、早川由美子監督(「ブライアンと仲間たち パーラメント・スクエア SW1」)、酒井充子監督(「台湾人生」)の5名。

各監督が隣に座っている監督



前列左から鯨監督、宮崎監督、三浦監督、後列左から酒井監督、早川監督

を紹介するという異例の趣向で始めると、思わぬ私生活の様子も語られ、監督も参加者も大笑い。

続いて、それぞれのドキュメンタリーへのこだわりについて、「一つの作品に時間をかけて自分自身を表現すること」(鯨監督)や「生(なま)の対象にどうせまれるか」(宮崎監督)など意見は尽きず。

参加者から「異国の地での生活を経済的にどうクリアしていたのか」との質問には、「働かなくてもいいだけの貯金をして行きました。後は体力ですね!」(早川監督)と明るく答えました。

最後に、今後の展望について、「自主上映会を始めとして、全国の色々な方に見ていただきたい。」(三浦監督)、「これからも台湾を中心にしたドキュメンタリーを作っていきたい」(酒井監督)など熱い想いが語られました。あっという間に時間が過ぎ、終始笑いの絶えないトークサロンとなりました。

### ▼「赤い点」

ゲストトークには、主演の猪俣ユキさんとプロデューサーの園木美夜子さんが登壇。

まず、園木さんから、主役に猪俣さんを選んだ理由について、「宮山監督は目力が強くてボーイッシュで芯が強い女の子を探していました。インターネットで猪俣さんの写真を見て直接会うことになり、そこで即決したようです。」と説明。

猪俣さんは、「宮山監督と過ごして私が感じた印象は、宮山監督はもっとも強く美しい、スーパーウーマンみたいな女性だな、ということでした。自分と真逆だっ

たり同じだったりすることもあり、学ぶことがいっぱいあります。」と監督の印象を語りました。

園木さんは、「宮山監督は次回の作品について、ドイツ人が日本に来て異文化を感じるものを表現しようとしています。今はドイツを拠点に活動していますが、今後ますますボーダレスに活動していくことと思います。」と今後の見通しを報告。

最後に、猪俣さんから「今回の映画を見て、商業用の映画だけではなく、静かな映画のよさもわかってもらえればうれしいです。みなさんにはぜひ映画館に行って作品を見てもらって、映画のさらなる発展に協力していただきたいです。」と期待を寄せました。



左から猪俣さん、園木さん

(裏面に続く)

## ▼「台湾人生」

ゲストトークでは、まず、酒井 充子監督から制作のきっかけについて、「以前から台湾映画を見ることが好きで台湾に行ってみた」と思っていました。そして、実際に訪れたときに流暢な日本語を話すおじいさんに話しかけられ、日本統治時の話を聞きました。その時は、もっと話を聞きたいと思いましたが時間の都合上、中途半端になってしまいました。



この経験と以前勤めていた新聞社での映画関係の取材を通し

て感じた映画制作の魅力が重なって映画を撮ろうと思った。」と紹介。

「最初は、物語風に制作しようと考えていましたが、取材をしている中で、本人の日本語の独特なイントネーション等をダイレクトに伝えたいと思いたち、初期の段階でドキュメンタリーに変更しました。」と制作経過を説明。

その後、観客から多くの感想、質問が寄せられ、最後に、監督は「一人ひとりが台湾に興味をもち、日本が今までおこなってきたことに思いを馳せて欲しいです。過去から今へのつながりを考えて欲しいです。」とメッセージを送りました。

## ▼「ぐるりのこと。」

上映後のゲストトークでは、まず、橋口亮輔監督から作品制作のいきさつは、「『ハッシュ』を撮

っている途中から、法廷画家の映画を撮りたいと思っていて、法廷画家 10 名くらいに実際に取材を試みました。数多くの裁判に触れて何かしら自分の人生に裁判の影響を受けているだろうと思っていました。

ところが、実際には誰にも裁判のことを話さず、裁判に対して自分なりの正義感を当てはめることがないということを知って、主人公として面白いと思いました。」とのこと。



これまでの同性愛のテーマから離れて、普通の夫婦の物語をつ

くったのは、「自分が鬱になったことが大きいと思うんですが、「人と一緒に暮らす」というのがどうということなのかをやってみたかったんです。「人に絶望を与えるのも人だし、人に希望を与えるのも人なんだ」と本当に感じました。

そこから、「人と一緒にいることが希望になる」ということを伝えたくて、普通の夫婦なんだけど、絶対に別れない夫婦の物語をつくることにしました。」と説明。

その後、主演のリリー・フランキーさんや木村多江さんの話題に移り、会場から感想・質問が多く寄せられ、あっという間のゲストトークとなりました。

※「エスケープ」のゲストトークは、初回と内容が重複するため、デイリーニュース vol3 を参照ください。

# 本日の上映作品&来場ゲスト

## ▼木村監督来場&「劔岳 点の記」特別上映



明治 39 年、陸軍参謀本部の測量手・柴崎芳太郎は、日本地図最後の空白地点である劔岳の測量を命じられる。熟練の案内人、宇治長次郎の手助けのもと、総勢 7 人の測量隊一行は前人未踏の劔岳に挑む。実際に劔岳、立山連峰でロケを敢行し、過酷な撮影の末に完成に導いた渾身作。

### 木村大作監督

1939 年生まれ。東京都出身。1958 年東宝撮影部にカメラ助手として映画界入り。1973 年「野獣狩り」で初めて撮影監督に。代表作は『八甲田山』(77)『復活の日』(80)『居酒屋兆治』(83)『華の乱』(88)『あ・うん』(89)『誘拐』(97)『ホテル』(01)『赤い月』(04)『憑神』(07)など。『劔岳 点の記』で、初めて監督を務める。



## ▼飛べ、ペンギン

このところ、日本では韓国エンターテインメント産業への関心は高いものの、韓国の人々の抱

える問題を共有する意識は決して高くない。しかも、韓国ではこのような社会問題に鋭いメスを入れる作品が少ないのも現実である。



こうした状況下でイム・スルレ監督がメガホンを執った映画「飛べ、ペンギン」は、生の営みに目を向け、韓国社会が抱える様々な問題点を冷酷ではなく、むしろ心の氷を融解させていくかのよう

に優しく、時に厳しい視点で描いていく。

(根本理恵 放送大学客員准教授、東京大学非常勤講師、字幕翻訳者)

### ナム・ギョソン プロデューサー



## ▼チベットの音調

単調に繰り返される独特な音調と腹の中から搾り出される低い歌声に乗って、この映画のキーワードとなる一人の女性が描かれていく。

そのシーンに続く導入の映像が見事である。切り立った黄土色の絶壁に濃く青い空、目に痛いくらい真っ白な雲、強い風にはためくロープにくくりつけられた五色のタルチョ(祈禱旗)、レンガ色の僧衣をまとった僧たちとマニ車を回す老婆、賑わいを見せるラサの町、山の斜面を引き上げられていく色鮮やかな曼荼羅、そして荘厳なボタラ宮。



観光客が思い描くとおりのチベットの姿がそこにあり、その中に場違いな感じがする集音マイクを手にした漢民族の美しい女性・安羽(アン・イー)がいる。彼女の姿に興味を持つ精悍なマスキのチベット人の若者アジャ、対照的な二人の間にある恋の予感が観客を映画の中に引き込んでゆく。

(鈴木 一 株式会社ワコー配給部)

チャン・ルイ プロデューサー チョ・ターシブ プロデューサー



## ▼シネマ・ピクニック〜ロイドの巨人征服 無声映画・活弁付

自称病弱の大富豪ハロルド。療養のため看護婦と召使いを連れて南米のとある島にやって来た。ところが、癒しの楽園のつもりできた島は革命戦の真っただ中。何も知らないハロルドも巻き込まれ、革命軍の手により牢屋に入れられてしまう。



放り込まれた牢屋にいたのは、身長 2m50cm を超える大男。二人は協力して牢屋を脱出するが、大男は歯痛のため身動きがとれない。そこで、歯を抜くことを思いついたハロルドだが…。

活動弁士 佐々木 亜希子さん



## ◆今日・明日のチケット情報／日にち、会場、売行き状況(○余裕有、△残少、×完売)、作品名(上映時間)

◎9月6日(日)

⇒ウィルホール

○「劔岳 点の記」(10:00)

○「飛べ、ペンギン」(14:00)

⇒大会議室

○「チベットの音調」(10:00)

○「シネマ・ピクニック」(14:00)